紫錦山西光寺寺報　号外

浄土真宗本願寺派
西光寺寺報

西光寺第十七世住職『紫光院釋洪淳』が往生いたしました

慈光照護のもと、門信徒の皆様には愈々ご清祥にてお念仏ご相続のことと存じます。

かねてより療養中でありました住職ですが、無常の風が吹き、去る八月二十六日午前七時三十五分に一つの息永く絶え、満八十一歳を一期として阿弥陀如来の浄土に往生の素懐を遂げました。

山門前の案内板

翌二十七日に親族の通夜、二十八日には門徒・一般の通夜、二十九日に茶毘式（葬儀）をつとめさせていただきました。

葬儀委員長の山野修一様、総代の方々はじめ、ご門徒の皆様には、通夜・茶毘式にわたり、本当に親身にご協力いただきました。さらに、門徒葬（寺族が死去したときにはご門徒さんが葬式を出すという古くからの習慣）ということで、葬儀委員長とも相談し、ご門徒さんからのご香典には一般向けのお返しをせず、お砂糖のみとさせていただきましたこと、どうかどうかご理解くださいますようお願い申し上げます。また、ご門徒のみなさまからは、社会情勢の厳しい中ご無理をおかけしたことと心苦しいのですが、たくさんのご香典を頂戴いたしました。本当なら駆けつけてお礼を申し上げるべきではございますが、まだ満中陰と報恩講を控えておりますので、この紙面を借りて心よりお礼申し上げます。本当に有り難うございました。また、ご門徒ではない他門徒（お手次のお寺が遠いため月命日だけお参りしているお家）のみなさまからも、ご門徒同様のご香典を頂戴いたしまして、たいへん恐縮しております。みなさまからのご香典は無駄にすることなく節度を持って使わせていただきました。本当に有り難うございました。おかげさまで無事に茶毘式を終えることができました。ご門徒のみなさまには、満中陰法要が終わった時点で、会計報告をさせていただきたいと思っております。

本堂内陣の荘厳。赤いものには紙を巻き、光るものには折った紙（地方により異なる）を貼るのだそうです。

式場の様子。派手な祭壇はなく質素にお花だけにしました。写真もありません。

住職は昭和七年に西光寺の次男として生を受けました。入院中に聞いた話ですが、長男は生まれてすぐに死亡、住職のあとに生まれた長女と次女も相次いで生後一年あまりで死亡と、四人のきょうだいのうち三人を亡くすという厳しい境涯でした。当時の医学ではどうしようもなかったのでしょう。そのため住職は当時としては珍しい一人っ子として生きて参りました。きょうだいがいればいろいろなことを話し合ったり相談したりできたと思いますが、その点はきっと寂しかったことだろうと思います。

昭和四十七年に先代住職の死去に伴い、三十九歳にして第十七世の住職に就任し、以来四十二年あまりの長きにわたり西光寺の護持発展に尽くしてまいりました。ただ、若い頃より病気に縁があり、三十代で結核の手術をして肺の一部を切除、その後も五十代で胆のうを全摘出、七十代で前立腺の全摘出（後に検査で前立腺がんの発見）、二度の加齢性黄斑変性の手術、喉のポリープの手術と病気の数と手術の回数を自慢するありさまでした。

そして今年、どうも体調が悪い、しっかり食べているのに痩せてくるということで検査の結果、急性骨髄性白血病と診断されました。六月五日に入院した福井大学病院では早速抗がん剤治療を始めるとのことでしたが、高齢でもあり、担当医からは「何も治療をしなければ一～二ヶ月の命。抗がん剤も効果がある割合が20～30％しかない。たとえ効果があっても、完治するわけではなく、一年から一年半ぐらい入退院を繰り返しながら過ごすことになるだろう」という宣告を受け、家族でたいへん悩みましたが、抗がん剤治療は行わないという選択をして三国町の宮崎病院に転院しました。

そこでの二ヶ月あまりは、入院当初に喉のリンパ腺が腫れ、高熱が出た以外は、口内炎や義歯の不具合による歯茎の痛みといった軽い症状だけで、心配していた感染症にもかからず、穏やかな時を過ごすことができました。もちろん赤血球、白血球、血小板ともにたいへん少ない状況でしたので、移動は車いす、食べ物でも生ものなどは制限されてはおりました。ただ、八月に入り、血球数の減少が顕著になり、何度か輸血をしていただきました。亡くなる前日の八月二十五日にもベッドの上で甲子園の決勝戦をテレビ観戦し、コンビニのコーヒーを美味しそうに飲んでいました。しかしその直後に血小板の決定的な不足から脳内出血を起こして意識を失い、翌朝亡くなるまで一度も意識が戻ることはありませんでした。二十六日には外出許可をもらって福井市の娘（私の妹）宅に行く予定でした。

亡くなる前日の笑顔。
歯がないのは義歯修理中（笑）

私は白血病とあと一～二ヶ月ということを住職に話したとき、「手本を見せてください。」と言ってしまいました。『生ある者はすべては死に帰す』その死にゆく姿をこの二ヶ月あまりの間、彼はしっかりとお手本を示していってくれました。さあ次は私の番です。住職のように立派に死ねるかな。

住職の生前中は門信徒のみなさまにはひとかたならぬお世話になりました。本当に有り難うございました。私はいい歳をしてお寺のことも世間のこともなんにも知らない未熟者ですが、これから住職の跡を継いで、微力ながら頑張っていこうと思っております。門信徒のみなさまあってのお寺です。これからも変わらぬご協力をいただきながら、みなさまと共々に『南無阿弥陀仏』の名号（みょうごう）に込められた阿弥陀如来の悲願を聞かせていただきたいと思います。